

23年前から習いつづけている「生け花」は、私に「学ぶ」ということについて、いろいろなことを教えてくれた。

たとえば習い始めのころ、ひたすら先生の教えの通りに真似ることは心地良い体験であった。「生け花」の稽古は、最初は花の扱い方の基本と生け方の形を覚えることから始まる。私にとって、それらの項目を何も考えずに真似ながら覚えることは苦痛ではなく、むしろ頭を使わなくとも次第に体が覚えてくれることは心地よかった。

次に、5年も経つと自由に生けられる機会が与えられるようになる。もちろん基本から始まってそこにどのぐらいオリジナリティを生かすかというレベルであるが、その時点で、私は生け花をマスターしたと思い込んでいた。

しかし、それからさらに5年ほど経ったある日、自分が何も身につけていないことを思い知らされた。その日、始めて自分で花材を選ぶことを許されたのだが、花屋へ行っても何を買って良いのかわからなかったのである。花屋の前で今まで先生が取り合わせてくれた花材を思い出し、同じ組み合わせをつくろうとしたが、3種類目がどうしてもみつからなかったのである。他の花で代用させようとしてもどれにすべきか決めることができなかった。花の取り合わせを考える上で必要なことは無数にある。花の色、素材の質感、量、長さのバランス、季節感・・・などなど。しかし、その時の私にはそうした項目がわかってはいても実際に応用できるものはなかった。自分がいかに何も考えずに学んでいたかを思い知らされたのである。

「日本語を教える」あるいは「日本語の教え方を教える」という立場になって、学ぶ側の人たちが、ただ教師の真似をするだけでなく、考えながら学ぶということに早く気づいてくれたらと考える。私にとって「生け花」は「学ぶこと」を教えてくれたものである。

.....

上記の考えを二人一組になった時、パートナーに話してみた。そして気が付いたのは、私が「生け花」を通して知った「学ぶこと」に関する気づきは、確かに私自身の体験ではあるが、教師として、一般的な教育理念として考えてよいものかどうかということである。私がただ真似をするに安心感を覚えたのは、私が「生け花」を習うまでに受けてきた教育、私自身の性格などが土台となって起こったことであり、私の生徒たちが全て同じ境遇のもとに育ってきているとは限らない。今までの経験から、アジアの学生には私のようなタイプの人が多いということを感じているが、それも私の思い込みかもしれないし、確かにヨーロッパ、たとえばドイツの人たちにはこうした理論はあらためて言うまでもないのかもしれないということに気づいたのである。「生け花」を通して得た体験は、私にとって貴重な個人的体験であり、確かに私に「学ぶこと」自体の本質を教えてくれたが、このことを自分の仕事の中で他の人に押し付けたり、あらためて言ったりする必要がないことに気づいたのである。

.....

しかし上記の気づきは、グループディスカッションの中でさらに修正された。グループの数名の方に、教師の個人的な体験はその人の教授観であり、それを前面に出すことは間

違っていないと言われたのである。もっと個としての自分に自身をもって良いと言われた。私はどこかで教師は常に中立であり、客観的な立場にいなけらばならいと思いついていたのかもしれない。たとえ個人的な体験であっても、それは教師自身の財産であり、そのことを土台に教授活動をするのは間違っていない。もちろん教師の個人的な体験を異なる環境の生徒に押し付けることは良くない。しかし、常に自身が得た体験やそこからくる教授観を土台として教育を考えていくことは間違っていないということをあらためて発見したのである。

.....

結論として、私にとって「生け花」は「学ぶこと」を教えてくれたものであるという考え方は変わらない。しかし、それは、自分自身の個人的な体験を通して身に付けた私一人が体感したものであるということを自覚しつづけることが必要であろう。そして、その自覚のもとになお、私の教師としてのこれからの活動の上で土台となるべきものであると考える。

以上